東大本番レベル模試　国語採点基準

1　文（文章）で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A項

a　以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。

b　ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されています。

c　ある要素に加点するか否かが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点（独立採点）すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

d　**解答通り**という条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B項

a　答案中に大きな誤読と判定される内容（語句）などがある場合は、その内容（語句）を減点要素として示されている場合もあります。

b　加点要素でも減点要素でもない部分もありえます。その部分は加点も減点もしません。

C項　次に該当するものは、答案の形式上の不備として、一箇所につき1点の減点要素とします。

a　誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。

b　脱字。

c　文末の句点の脱落。

＊字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。

d　その他不適切と判断せざるをえない箇所。

e　不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。たとえば「…とはどういうことか？」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。

＊ただし、「ことである」などの表現も「こと」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また、「からである。」などの表現も「から」などで結んでいるものと同様適切な文末処理が行われていると見ます。また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

2　日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を０点とします。

a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。

b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を０点とします。

c 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたもの。

d 答案の文章が最後まで完結していないもの。

4 **古文あるいは漢文の訳を記述する設問**の場合も以上に準じますが、文末の句点や文末の処理あるいは答案の完結にこだわらなくともよい場合はその都度明記されています。

２０２１ 最終東大模試　採点基準・採点例　第一問（４０点満点）

■採点の原則

①　全ての答案について各要素単独採点とするが、答案が全く日本語の文（章）の体をなしていないと判断される場合は、要素の有無に関係なく０点とする。

②　漢字の誤り、送り仮名の誤り、句点の抜けについては、一つごとに１点減点する。

問一

■形式上の不備

・要素Ａと要素Ｄがイコール関係でつながれていない場合、Ｄ要素を１点減点。

・要素Ｂと要素Ｃの対立、あるいは矛盾が表現されていない場合（たとえば要素Ｂにしか言及されていない場合）、加点なし。※要素Ｂ・Ｃのみが加点なしで、その他要素は加点対象。

・文末表現は要素Ｅ参照

基準　配点８点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。

A　世界認識は文化ごとに異なるという文化相対主義は、B　同じ理性をもつはずの人間が　C　多様な経験的主体でもあるという矛盾を止揚する発想の一つだということ。（７１字）　D

■採点方法：各要素単独採点

■要素Ａ「世界認識は文化ごとに異なるという文化相対主義は」：２点

・本文の「「自然の事物としては同じものが文化によって異なる仕方で認識され意味づけられる」という文化相対主義の発想」に対応する。ほぼ同等の説明内容と判断できれば加点。

・文化相対主義という言葉を出すだけでその内容を説明していない解答、あるいは逆に文化相対主義の内容を述べるだけで、それが「文化相対主義」の説明であることが明示されていない場合は加点なし。

・説明が曖昧であると判断される場合は１点とする。

■要素Ｂ「同じ理性をもつはずの人間が」：２点

・本文の「超越的な理性において一なるものであるはずの「人間」」、あるいは「一なるものとして超越論的な人間」といった表現に対応する。

・「超越的な理性」「超越論的な人間」といった表現のみで、「一なるもの」、「同じもの」「同一性」といった内容が表現されていない場合は１点。

■要素Ｃ「多様な経験的主体でもある」：２点

・本文の「経験的な多様さにおいて見いだされる、～といった「一見して非合理的な」実践」あるいは「極めて多様な経験的主体としての人間」に対応する。ほぼ同等の説明内容であると判断できれば加点。

・「多様な」「多様性」といった内容が表現されていない場合は１点。

■要素Ｄ「矛盾を止揚する発想の一つだ」：２点

・本文傍線部アの「その主な調停策の一つが～だ」および「両者の対立と調停が図られる場」に対応する。

・「対立を調停する発想」「矛盾を受け止めるもの」など、ほぼ同等の説明内容であると判断できれば加点。

・「～する発想の一つだ」ではなく「～する発想だ」などの、〈ワンオブゼム〉のニュアンスがない表現の

場合も加点。

・要素Ａと要素Ｄが「ＡはＤだ」あるいは「ＤがＡだ」といったイコール関係になっていない場合、１点。

■要素Ｅ　文末表現は「……こと」という形が原則。不適切な文末表現と判断される場合は１点減点。

問二

■形式上の不備
・文末表現は要素E参照

基準　配点8点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。

A　B　C

文化を、一つの世界に対する多様な認識のあり方としてではなく、世界を制作していく多様な実践の産物　と　A

D

して捉え直す、現代人類学の展開のこと。

■採点方法：各要素単独採点

■要素A「（文化を）～として捉え直す」：1点
・本文傍線部イの「転回」の説明にあたる要素。
・「文化を」の有無は不問。「捉えなおす」など、「転回」のニュアンスがある場合、加点。
・説明が曖昧であると判断される場合は加点なし。

■要素B「一つの世界に対する多様な認識のあり方」：3点
・本文の「文化相対主義」を説明している箇所に対応する要素。具体的には「自然の事物としては同じものが文化によって異なる仕方で認識され意味づけられる」、「一なる自然と多なる文化」、「現実に存在する世界が一方にあり、他方にそれを認識する異なるやり方（世界観）がある」、「文化は単なる世界観の発露」といった内容に重なる表現であれば加点。
・要素Bは否定的に表現されていなければならない。肯定的に表現されている場合は加点なし。

■要素C「世界を制作していく多様な実践の産物」：3点
・本文の「現地の人々が生きる世界を彼らの視点から捉える」、「彼ら（現地の人々）が生きる世界は現実に存在する世界を彼らなりの仕方で作り上げていく実践の産物である」、「（文化は）さまざまな仕方で世界を制作し認識する実践の産物、文化＝自然」といった内容に対応する要素。
・「世界の捉え方」や「世界観」といった内容に対比される、「世界の在り方」「現実に存在する世界」「実践の産物」といった内容であると判断できれば加点。
・要素Cは肯定的に表現されていなければならない。否定的に表現されている場合は加点なし。

■要素D「現代人類学の展開」：1点
・本文の「二〇世紀末から今世紀初頭にかけての現代人類学の展開」という内容に対応する要素。「人類学の展開」等、ほぼ同等の説明内容であると判断できれば、加点。

■要素E：文末表現は「……こと」という形が原則だが、「……展開。」など、適切な内容の名詞で終わっている場合も許容する。不適切な文末表現と判断される場合は1点減点。

問三

■形式上の不備
・文末表現は要素D参照

基準　配点8点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。

A　世界に存在する同じ事物に対しての見解ではなく、B「そもそもこの世界に何が存在するか」についてC の見を異にする者同士が影響を及ぼし合うこと。

■採点方法：各要素単独採点

■要素A「世界に存在する同じ事物に対しての見解の相違ではなく」：2点
・本文の「世界に存在する同じ事物に対する認識の相違ではなく」に基づく説明。ほぼ同等の説明であると判断できれば、広く許容して加点。
・説明が曖昧であると判断される場合は2点とする。

■要素B「「そもそもこの世界に何が存在するか」について」：3点
・本文の「「そもそもこの世界に何が存在するか」に関わる相違」に基づく説明。ほぼ同等の説明内容であると判断できれば加点。
・説明が曖昧であると判断される場合は1点とする。

■要素C「見解を異にする者同士が影響を及ぼし合うこと」：3点
・傍線部ウの「異なる見解をもつ存在者同士の相互作用」に基づく。「対立する見解をもつ～」など、ほぼ同等の説明内容であると判断できれば加点。
・「相互作用」の言い換えとして、「交流」「関わりあい」といった、「互いに作用を及ぼす」かどうかが不明な表現を用いている場合は1点とする。

■要素D：文末表現は「……こと」という形が原則だが、「……関わりあい。」などの適切な名詞で終わっている場合も許容する。不適切な文末表現と判断される場合は1点減点。

問四

■形式上の不備
・文末表現は要素E参照

基準　配点13点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。

A　部分的に繋がってはいるが、完全に同じではない世界を生きる知能機械と人間との相互作用は、B　どちらか一方を基準とするものではなく、C　他者の生きる世界との比較を通じて、D　それぞれが自明視する世界の前提やその可変性を示す営為として捉え直されるということ。（１２０字）

■採点方法：各要素単独採点

■要素A　①部分的に繋がってはいるが、完全に同じではない世界を生きる：２点
②知能機械と人間との相互作用は：２点
・傍線部エの「それぞれに異なる世界を生きる」の内実を説明するものとして、本文第９段落の内容および１０段落の「知能機械は、その技術的特性からいって人間と部分的に近く、部分的に遠い世界を生きている」に基づく要素。ほぼ同等の説明内容であると判断できれば加点。

■要素B「どちらか一方を基準とするものではなく」：３点
・本文９段落の「統一的な基準がないままに」・「超越論的な視点から俯瞰するのではなく」など、ほぼ同等の説明内容であると判断できれば加点。
・説明が曖昧であると判断される場合は１点とする。

■要素C「他者の生きる世界との比較を通じて」：２点
・本文７段落の内容に基づく説明。ほぼ同等の説明内容であると判断できれば加点。
・説明が曖昧であると判断される場合は１点とする。

■要素D「それぞれが自明視する世界の前提やその可変性を示す営為として捉え直される」：４点
・傍線部エの「それぞれに異なる世界を生きるもの同士の関わり」の内実を説明するものとして、本文７段落の内容に基づく要素。
・「人類学的分析として捉え直される」等、説明が曖昧であると判断される場合は２点とする。

■要素E：文末表現は「……こと」という形が原則。不適切な文末表現と判断される場合は１点減点。

問五　漢字の書き取り　各1点×3

a　両義

b　絶　※「断」の字も〇1点とする

c　実装

第二問

（一）文科ア・理科ア　傍線部を現代語訳せよ。　【３点】

［傍線部］　Ａ１わが子どもにＢ２思ひまし給へり。

［解答例］　Ａ１私の子供たちよりもＢ２姫君を大切に思っていらっしゃる。

［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

Ａ【１点】わが子どもに　～　まし　→　私の子供たちよりも

※「私の子供たち」は「私の子供・私の子」等でもよしとする。「私」は「自分」でもよしとする。

※「よりも」は、比較の対象を表していれば「より・と比べて」等でもよい。

Ｂ【２点】思ひまし給へり。　→　姫君を大切に思っていらっしゃる。

※「大切に思う」＋尊敬「～ていらっしゃる」＋存続「～ている」で【２点】。

※「姫君を」の有無は不問（「姫君」は「対の方・対の君」等でもよい）。

※「大切に思う」は「大事にする・深く想う・愛する・思いがまさっている」等でもよい。

単に「思う」となっている場合はマイナス【１点】。

「思う」の意がない場合は、Ｂは×。

※尊敬の訳は「お～になる・～なさる」等でもよい。尊敬の意がない場合はマイナス【１点】。

※存続の意がない場合はマイナス【１点】。ただし、尊敬が「～ていらっしゃる」になっている場合は、存続はそこに入っているものとする。

（一）文科エ・理科ウ　傍線部を現代語訳せよ。　【３点】

［傍線部］　Ａ１深き山に入り侍りて、Ｂ２さまは変はるとも、
［解答例］　Ａ１深い山に入って、Ｂ２出家したとしましても、
［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］
Ａ【１点】深き山に入り侍りて、　→　深い山に入って、
※丁寧の補助動詞「侍り」の訳「～です・～ます・～ございます」は、ＡかＢのいずれかにあればよい。
　丁寧の訳がない場合、「～なさる・お～になる」など尊敬の訳になっている場合、「お～する・～申し上げる」など謙譲の訳になっている場合は、全体からマイナス【１点】。
※「深い山」は「山奥」などでもよく、「入って」は「入り」でもよい。

Ｂ【２点】さまは変はるとも、　→　出家したとしましても、
※「出家する」の意がない場合は×。「出家する」の意があれば【１点】。
※右の【１点】がある上で、「（たとえ）～ても」（逆接仮定）の意があれば【２点】。「～だが・～けれども」等、逆接確定の訳は×。

（一）文科キ・理科オ　傍線部を現代語訳せよ。　【３点】

［傍線部］　A１人づてならでB１うけたまはらば、C１いかに

［解答例］　A１人づてではなく直接B１声をお聞きしたら、C１どれほど嬉しいことか

［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

A【１点】人づてならで　→　人づてではなく直接

※「人づてでなく」の意があればよい。「直接」の有無は不問。

B【１点】うけたまはらば、　→　声をお聞きしたら、

※「お聞きする・うかがう・言葉（返事）をいただく」（「聞く」の謙譲表現）＋「～ならば」（仮定）で【１点】。

※「うけたまわる」のままは×。

※「声を・姫君の声を」の有無は不問。

C【１点】いかに　→　どれほど嬉しいことか

※「どれほど（どんなに）嬉しいか（よいか）」の意があればよい。

文科（二）・文科のみ　傍線部「…」とは誰のどのような気持ちか、説明せよ。　【５点】

［傍線部］　いかにもして人に笑はれなんことをし出ださせん

［解答例］　A１北の方の、B２姫君を世の笑い物にして、C２入内の話をつぶそうという気持ち。

［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

A【１点】北の方の、

※B・Cの主体として「北の方」が書かれていればよい。「北の方」は「継母」でもよい。「母親・故母宮・姫君・対の方」は×。

B【２点】姫君を世の笑い物にして、

※「姫君を笑い物にする・姫君に恥をかかせる・姫君の悪い噂を立てる」等の意が読み取れればよい。

C【２点】入内の話をつぶそうという気持ち。

※「入内をつぶす（邪魔する・妨害する）」の意が読み取れればよい。

※右の意がなくて「中納言（父親）に嫌われるようにする」がある場合は【１点】。

文科（三）・理科（二）　傍線部「・・・」とはどういうことか、説明せよ。　【５点】

［傍線部］　Ａ２よしなきことを思ひ初めて、Ｂ２雲居はるかに聞きなしたてまつらんことのＣ１口惜しさよ。

［解答例］　Ａ２姫君に恋をした末に、Ｂ２姫君の入内を聞くこととなり、Ｃ１残念だということ。

［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

Ａ【２点】姫君に恋をした末に、

※「姫君に恋をした・姫君を愛した・姫君に思いを寄せた・愛した姫君」等の意があれば【２点】。

「恋愛」の対象として「姫君」がない場合は【１点】。

※「恋愛」に対する「叶わない・無理な・甲斐のない」等の形容の有無は不問。

Ｂ【２点】姫君の入内を聞くこととなり、

※「姫君の入内を聞き・姫君の入内を知り」の意があれば【２点】。

「姫君の」はＡで「姫君」が言われていればなくてもよい。

ただし、「入内を聞き（知り）」の意はあるが、解答全体を通して「姫君」がない場合は【１点】。

※「入内」は「帝に嫁ぐ」等でもよい。結婚の意がない「参内する・宮中へ行く」等では×。

Ｃ【１点】残念だということ。

※「残念・遺憾」の意があればよい。

文科（四）・文科のみ　傍線部「…」とはどういうことか、説明せよ。　【５点】

［傍線部］　A２世のつつましさにのみおぼゆれば、B２かやうにおはすること、C１心苦しく

［解答例］　B２少将が訪れることが、A２世間にはばかられて、C１つらいということ。

［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

A【２点】世間にはばかられて、

※「世間にはばかられる」の意があれば【２点】。「世間に」がない場合は【１点】。

※「世のつつましさ」のままは×。

※「世間」は「周囲・世の中」でもよい。「周囲の人々」の意ととれない「この世・現世」等は×。

※「はばかられ」は「遠慮され・目が気になり・恥ずかしく」等でもよい。

B【２点】少将が訪れることが、

※「少将が訪れることが・少将の訪問・少将が来ることが」の意があればよい。

※「少将」という主体がない「訪問が・当来が」等となっている場合は【１点】。

C【１点】↓　つらいということ。

※「つらい・苦しい・困惑する・迷惑に思う」等の意があればよい。

「悲しい・寂しい・申し訳ない・できない・気の毒だ・かわいそうだ」等、「心苦しい」のままは×。

文科（五）・理科（三）　傍線部の和歌の大意をわかりやすく説明せよ。　【６点】

［傍線部の和歌］　Ａ３かひもなき我が身と思へばＢ３鶴の子の雲の上にも思ひ立たれず

［解答例］　Ａ３自分は大した者でもないので、Ｂ３入内しようという気にもなれない。

［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

Ａ【３点】かひもなき我が身と思へば　→　自分は大した者でもないので、

※「自分は大した者（人間）ではない・自分には価値がない・自分は入内するほどの者ではない」等の意が読み取れればよい。

※右の意がなく「どうにもならない自分・どうしようもない自分」等がある場合は【２点】。

Ｂ【３点】鶴の子の雲の上にも思ひ立たれず　→　入内しようという気にもなれない。

※「入内する気はない・入内したくない・入内は考えていない・入内できない」等の意があれば【３点】。

※「入内」は「帝に嫁ぐ」等でもよい。

※Ａで「入内」を言っている場合は、「宮中は気にかけていない・宮中に行くつもりはない」等でもよい。

※Ａ・Ｂに「入内」がない場合は、「宮中は気にかけていない・宮中に行くつもりはない」等は【１点】。

第三問

（一）a　2点

a 1点　　b 1点

私のために　　縁談を整えてくれ，

※読み方は，「予が為に縁を作（な）し」

a，「予が為に」の部分の解釈……1点

「私のために」「自分のために」は○

※「予」のままにしているものは×―1点

※「ために」の解釈を間違えているものも×―1点

b，「縁を作し」の部分の解釈……1点

「縁談をととのえてくれ（て）」「縁をとりもって（くれて）」「仲をとりもって（くれて）」

「間に入って（くれて）」「仲人になって（くれて）」「縁を結び」などは○

※「縁談をしてくれて」「縁をつくり」などは×―1点

※bは，下へ続く形になっていないものは×―1点

（一）ｂ　２点

ａ１点　　ｂ１点

おおむね　　内容を理解していた。

※読み方は，「頗（すこぶ）る其の意を識（し）る」

ａ，「頗る」の解釈……１点

「おおむね」「まずまず」「たいそう」「とてもよく」「かなり」「やや」「少しく」いずれでも○

※「すこぶる」のままでも○

※ｂの「理解」の位置が「ちゃんと理解していた」「精通していた」などになっていれば，ａの１点も○

ｂ，「其の意を識る」の解釈……１点

「内容を理解していた」「その意味を理解していた」「その詩の意味もわかっていた」「その意味を知っていた」など○

※ｂは言い切っている。下へ続く形にしているものは×―１点

（一）　c　2点

a 1点　　b 1点

やぶ医者に　　誤診されて

※読み方は，「庸医の誤る所と為り」

a，「庸医」の解釈……1点

「やぶ医者」「凡庸な医者」「平凡な医者」「愚かな医者」「だめな医者」など○

※「庸医」のままは×―1点

b，「誤る所と為り」の解釈……1点

※受身が欠けているものは×―1点

「誤診されて」「誤った診察（診療）をされて」「見立てをまちがえられて」

「診断を違えられて」など○

「（～が）誤診して」「（～が）まちがって」「誤るところとなって」など×―1点

※bは下へ続く形になっていないものは×―1点

（二）　８点

ａ２点　　ｂ３点

姫人の声は，　今まで一度も

ｃ３点　　ｂ

管弦の音色が私の耳を楽しませる　のに及ばないことがなかった。　（８点）

ａ，主語が補われていること……２点

「姫人の声は」「姫人の歌声は」「姫人のゆったりとした歌声は」「妻の歌声は」「朱氏の歌は」など○

※文頭になくてもよいが，補いのないものは×―２点

ｂ，「未だ嘗て～如かずんばあらざるなり」の解釈……３点

※「今まで一度も～に及ばないことはなかった」が直訳

※「今まで一度も」は「今まで」「一度も」片方だけでも可。

※「今まで一度も」は，「いつも」「つねに」でもよい。

※「～に及ばないことはなかった」は，「～に（比べて）劣るものではなかった」とか，「～にもまさっていた」「～よりもすばらしいものであった」などでもよい。

ｃ，「竹を吹き糸を弾ずるの耳を悦ばしむる」の解釈……３点

「管弦の音色が」（ｃ①）……１点

「私の耳を」（ｃ②）……１点

「楽しませる」（ｃ③）……１点

ｃ①「管弦（絃）の音色が」「管弦が」「音楽が」「楽器の音が」など○

※「管楽器を吹き，弦楽器をひいて」は×―１点

ｃ②「私の耳を」のように，「私の」を補っていないものは×―１点

※逆に「私を」のように，「耳」はなくても可。

ｃ③「楽しませる」「よろこばせる」のような使役表現がないものは×―１点

「幸せにする」のようであれば可。

※現代語訳問題であるから，文末を「～ということ」のようにしているものは１点減点。

（三）　６点

ａ２点　　ｂ４点　　ｃ

美しかった妻が，　二度と再びもとの姿には戻らない　こと。　（６点）

ａ，「蛾眉」の要素……２点

※「美しかった」要素……１点

「妻」のことであること……１点。

※「美しかった妻（姫人・朱氏）が」「美しかった亡き妻は」など○

※「妻は」「姫人は」「亡くなった妻は」「美しかった人は」など△―１点

※「美人は」「故人は」「亡くなった人は」は×―２点

ｂ，「復た全（まった）からず」の要素……４点

※「二度と（再び）もとの姿には戻らない」「二度と（再び）生き返らない」「決してもとには戻らない」「もう戻ってはこない」など○

※「二度と完全な姿には戻らない」は△―２点

※「死んでしまった」も△―２点

ｃ，「～こと」「～ということ」の有無は不問。

（四）文科のみ　１０点

a２点　　b２点

妻とむつまじく暮らした幸せな月日　を思うと，

c３点　　d３点　　e

腸がちぎれるような悲しみ　に堪えられない　という心情。　（１０点）

a，「華年」の内容……２点

※「むつまじく暮らした幸せな月日」は（注）がある。

※「妻と」「姫人と」「朱氏と」などが補ってないものは△―１点

b，「数ふる」の要素……２点

※「思うと」「思い出すと」「思い返すと」など○

※「指折り数えてみると」のようでもよいが，ただの「数えると」は×―２点

ただし，「～の思い出を数えると」なら○

c，「腸断」の要素……３点

※「はらわたがちぎれるような」「はらわたを断つ（断たれる）ような」など「腸断」の字義……１点

※「悲しみ」「非常な悲しさ」「悲痛」……２点。

d，「那ぞ堪へん」の要素……３点

※「堪えられない」「堪えがたい」など○

※「忘れられない」「思い出してしまう」「なつかしい」などは×―３点

e，文末表現は不問。